

第十三章
ほころび

オリパラ委員会の会長は選挙で選ばれたわけではない。この組織はもともと選挙制度を持たない不思議な公益法人だ。この法人の定款を精査して問題点を浮き彫りにした政治家やマスコミはいない。

まずもつてなぜこのような公益法人が設立されたのか。どのようにして会長人事が決まるのか。しかも会長が辞任する場合次の会長を指名するようだが、もちろんそんな規則はない。まるでどこかの国のトップを決める極めて不思議なやり方と同じだ。流行はやりのクラウドじゃあるまいし地上から見えない雲の中で最高責任者が決まる。ここで解説を中断して山本が深々と頭を下げる。

「あつ、言い間違った」

田中と大家が首をひねりながらテレビの中の山本を見つめる。

「ごめんなさい。間違えました。『最高責任者』ではなく『最高権力者』でした」

「なるほど。責任者なら責任をとるけれど権力者は責任はとらない。でも極めて偉そうに振る舞う」

田中が肯定的な意見を述べると山本が再び解説を始める。

失言するとバッシングされるがそのときは逃げ回り体調を崩したと入院する。しかもコネで入院する。新型コロナウイルスに感染して入院できずに自宅で亡くなる国民がいるのにこの人達はほとぼりが冷めた頃に再び表舞台に現れる。

新型コロナウイルスで休業要請が出た地域は大変だが、それ以外でも様々な問題が起こっている。休業要請や営業時間短縮要請は出ていない地域の飲食店は自主的に休業したり営業時間短縮したりする。しかし、自主だから補償はない。

「東京や大坂と同じように営業時間を短縮すべきだ」

暗黙のうちに強要されているようなものだ。声を出せないから政府から無視される。政府もむやみに緊急事態宣言を全国に広げようとはしない。むしろ虎視眈々とゴーツー・キャンペーンを再開しようと予算措置まで講じている。しかし、緊急事態宣言が発出されている地域で休業要請が出ているところはそれなりの休業補償が出る。声には出さないがキャンペーンに背を向ける事業者もいる。

もともと大都市から離れば離れるほど地方経済基盤は脆弱だ。走る車も高級外車から国産大衆車、そして軽四輪車に代わる。そしてめったに車を見ることもなくなる。言い換えれば過疎化だ。医療関係の社会的資本も充実していない。しかも医師も少ない。そういう中でオリパラ会長の問題発言が浮上。その問題を傍観し、まるで他人事のような発言をする政府。オリパラのボランティアが背を向けるのは当然だ。

「もう一度一緒に」

都知事が取り繕うような言葉を発しても聞く耳を持つボランティアは多くない。ついに聖火ランナーの辞退も出始める。さらには聖火リレーを拒否する知事も現れる。世間は「残念だ」

とは言わないがアスリートには同情する。前向きに何とかしようとする努力を怠ったオリパラ委員会や政府などに静かな怒りを向けているのだ。

山本は疲れたのか、あるいは説明するのがイヤになったのか映像に切り替えて姿を消す。映像に首相が登場する。

「縦割りの弊害を打破する」

首相の映像が消えると各大臣の顔写真が現れてナレータの声流れる。

何人もの〇〇担当大臣を任命して指揮命令系統を複雑にする。それでなくとも権限が交錯する巨大な組織をまとめ上げるのは困難なのにより複雑な組織体系にする。要は誰が真の責任者か分からないようにするためのなのだろう。

ワクチンは行革担当大臣、注射針は厚生省、感染症対策は経済再生担当大臣、ゴーツー・イートは農林水産大臣、ゴーツー・トラベルは国土交通大臣。これが縦割りではなく何割というのだろうか。

経済産業大臣と経済再生担当大臣とはどこが違うのか？ 担当という意味は？ 経済再生担当大臣と言うのがコロナウイルス感染症対策の矢面に立っている。厚生大臣との職務の違いは？ つまり守備範囲はどうなっているのか？ セカンドとサードの間を守るショートのような存在なのか？

行政改革担当大臣はどのような改革を行っているのか？ はんこを廃止するぐらいの仕事なら誰でもできる。本場に行政改革が必要なら担当大臣をわざわざ置かなくとも総理大臣がすればいいではないか。できないというのなら総理大臣は何のためにいるのか。しかもこの行政改革担当大臣の仕事はいつの間にかワクチン接種推進を職務としていてどう見ても行政改革をしているとは言えない。

少子化対策担当大臣。行政改革担当や経済再生担当と比べて守備範囲は明確だが、どれくらい少子化が防げたのか。こればかりは人口というはつきりとした数字で示すことができるから大臣の成績表を明確に示せるが成績の公表はない。大臣は知事と違って国民が選挙を通じて選ぶわけではないからか、適当な言い訳をして逃げる。そもそもこの「少子化対策」というネーミングがあまりにもネガティブだ。「生めよ増やせよ担当大臣」は極端としても「多子化推進担当大臣」とネーミングすべきではないか。

国会の中継放送の視聴率がなぜ低いのかについても触れられることはない。ところが大坂府知事がテレビ出演すると視聴率がぐっと上がる。関西の放送局はもちろんだがそれ以外の地方の放送局でも視聴率が上がる。

知事のようにカメラを見据えてしゃべれとは言わないが他人事のようにうつむいて紙を見つめて読み上げるだけ。しかも自分が作った原稿でないから言い間違いも多い。正面向いてしゃべる時は例のお決まり単語の連発。もし政治家が役者なら大根に非常に失礼だ。

COOHE（通称コーヒー）というスマホアプリがある。厚生省が肝いりで導入したコロナ感染通報無料アプリだ。しかし、利用する者はわずかだ。感染、あるいは感染者と濃厚接触してもスマホに通知が来ないアプリなど使う国民はいない。

中央官署は高学歴の人材を雇っているのに、しかもスマホを持っていない厚生省の役人などいないはずなのに実機でのテストをしていない。プログラムにバグがあっても知らん顔。人命に関わるアプリなのになんと無責任なことか。

やっと腰を上げた厚生省は専門家を増員すると言うがこれは焼け太りだ。長期的な戦略に基づいて自前でシステムエンジニアやプログラマーを養成してから立ち上げるべき政策ではなかったのか。新型コロナウイルスの急激な感染拡大に間に合わないからと言い訳するのならテレワークなどと偉そうに言う資格はない。

実効性のないアプリを発表して「厚生省はこんなに頑張っているんだ」と胸を張って税金と時間を無駄遣いする。そして最後には「見通しが甘かったと反省している。今後同じような事案が起らないようにしっかりと検証したい」で終わる。その間に感染者がそれこそしっかりと広がり死亡者も増える。重要な政策の誤りは殺人と同じだ。しかもたちの悪いことに責任をとらない。「政府は人殺し」と言われても仕方ないだろう。

政府は国民に安全安心を与えるのが仕事で国民を殺すことはあってはならない。しかも結果として国民の命を奪うことがあれば、それこそ危機感を持って緊張感を持ちながらしっかりと

原因を究明して詳細に説明する必要がある。

国民を死に至らしめるほどでないにしろ呆れた対応はいくらでもある。この呆れた対応が累積して重大な事件や事故の原因になるのだが、その一例が先ほども説明した省庁が権力を傘にして発する「通知」だ。

厚生省は地方自治体や医療機関に毎日のようにファックスで新型コロナウイルス感染に関する通知を送信する。命令や指示ではなく単なる通知だ。送信先の地方自治体などがその内容を了解したのか、通知内容通り実行されたのかは確認されない。典型的な一方通行、いわゆる上の御触れだ。しかも感染者数の報告はファックスではなくパソコンを使って送信しろという。どういう感覚で命令しているのだろうか。

通知さえすればもう自分たちに責任はないと言わんばかりのやり方だ。禊（ミソギ）は済んだとしても言いたげなやり方。国民を新型コロナウイルスの感染から本気で守ろうとしているのか甚だ疑わしい。

それだけでなく現場は前線基地のように様々な事態が錯綜する。そこに混乱を増長するような通知を出す。現場はたまったものではない。感染者を入院させる病院を手配するのに苦労している保健所に対して、それまでとまったく異なった通知を出す。

「病院の手配は中止。自宅待機させろ」

飲食店に対して営業制限を出す一方で与党議員や政府官僚が夜の街に繰り出して新型コロナウイルス感染する事例が多発する。すると優先的に入院する。国民には保健所を通じて自宅待機を指示しておきながら、自らはコネを使って数少ない病床を確保する。

今や昔のように金や権力で特定の公共的な施設を裏から手を回して利用することはできなくなった。特に国立や大病院では院長をよく知る政治家なりが入院しても現場の医師や看護師にとつては関係のないことで、コネを使って横柄な態度などしようものなら場合によってはマスコミが不正を暴露したりSNSで拡散したりする。もし院長が故意に政治家や官僚を優遇すればたちまち炎上してしまう。

今の医師は程度裕福な家庭で育っている。医師になるにはそれなりの教育費が必要で一般家庭で負担できる金額ではない。一人前の医師になるのに国公立大学の医学部に入学できても一千万円程度は必要だ。まして私立大学ならば五千万円では済まない。アルバイトをしながら奨学金をもらって医師をめざすことはまず不可能だ。

このように医師になれば元々裕福な家庭で育ったうえ、たとえ無給で働かされても金に困ることはない。だから気に入らない上司にへいこらすする必要はない。しかも若ければ正義感が強いから苦しむ患者をなんとか助けようとする気持ちも強い。一昔前とは環境が違うのだ。あうんの呼吸などない。情報はインターネットでいくらでも入る。そしてSNSで情報発信もできる。

さて料亭でおいしい料理や酒を飲食して帰りには手土産を受け取ってタクシーで送ってもらうような接待は新型コロナウィルスの感染が広がっている今どき通用しない。特に利権が絡む接待はすぐ白日の下にさらされる。それが分からない昭和の時代の人たちがまだここあちこちに少なからずいるのはなぜなのか。あえて言う必要はないだろう。

アパートの田中の部屋で大家と田中が機嫌良くある機嫌悪くテレビを見ていたが、そのテレビから煙が出てくる。

「わあ！ オーバーヒートしたんだ。消化器は？」

「アパートに消化器はないぞ」

「消防法違反じゃないですか」

「何とか冷やさなければならん」

そのとき画面に山本が現れる。

「国民の怒りがビデオレコーダーをオーバーヒートさせたんだわ」

山本がレコーダーのスイッチを切る。

「何だって！ ビデオを流していたのか」

「だって真面目に報道なんかできないわ。余りにも馬鹿馬鹿しいことが多すぎるわ」

「煙が……ゴホゴホ」

第十三章 ほころび

田中が咳き込む。

「大丈夫か！」

大家が心配する。

「ウイルスに感染したのかも」

テレビからPCR検査キットが出てくる。

第十三章 ほころび